

キリストの聖体

ルカ 9・11b-17

2019.6.23

カトリック高円寺教会 7 : 30 ミサ

主任司祭 吉池好高

今日はキリストの聖体の主日です。聖霊降臨の後の、教会の典礼の暦では年間の季節のこの時期に、あらためて主の聖体の祭日を祝うことには、特別な意味があると思われます。今日わたしたちが祝う主の聖体の祭日は、暦に従って経過する時の流れの中に生きるわたしたちの信仰生活にとって、これまで祝って来た主の十字架の死と復活、そして、わたしたちの教会の出発点となった聖霊降臨の出来事と切り離された祝いであるではありません。わたしたちがごミサのたびごとにいただくご聖体は、それ自体主イエス・キリストの御からであり、そのご聖体をいただくたびに、わたしたちは主イエス・キリストのいのちに結ばれ、信者として生きて行くためのいのちの糧をいただいています。けれども、聖体の秘跡に込められている恵みの神秘を信仰のうちに受け止め、その恵みにより豊かに生かされるためには、主イエス・キリストの聖体を中心とする教会の典礼全体が記念し、祝う、神がわたしたちのためにその御子イエス・キリストを通して与えてくださった救いの神秘に心を向ける必要があります。

わたしたちがいただくご聖体は、ミサの中心部分で司祭が唱える最後の晩餐でのイエスのおことばが指し示しているように、十字架の上でわたしたちのために渡されたキリストのお体であり、十字架の上でわたしたちのために流されたキリストの御血です。わたしたちの主イエス・キリストは、わたしたちの人間としての全ての罪をゆるし、わたしたちに神の子としての新たないのちを与えるために、十字架に架けられてそのいのちをささげてくださったのです。わたしたちの主イエス・キリストが十字架の上にそのいのちをささげてくださることによって、わたしたちに与えてくださった新たないのちは、十字架上に死んで、復活された主イエス・キリストの復活によってもたらされた新たないのちです。イエスはこの新たな神の子としての復活のいのちにわたしたちを招き入れるために、わたしたちのために十字架上でそのいのちをささげてくださったのです。そればかりではありません。復活された主イエス・キリストは、その十字架の死と復活によってもたらされた神の子として生きる新たないのちが、

世の終わりまで全ての人に届けられるように、弟子たちの心を開き、聖霊を与えてくださることによって、イエスの十字架死と復活による救いの新たないのちへの信仰の恵みを宣べ伝える者としてくださったのです。そして、弟子たちから始まった、この信仰の恵みを受け入れた人々の教会の中に、全能の神の力そのものである聖霊は、教会の祭儀であるミサと、その中心である聖体の秘跡のうちに、今日もイエス・キリストの、神の子としての復活のいのちを現存させ、イエスの御体である聖体をいただくわたしたちにそのいのちを分け与えてくださるのです。

今日、主イエス・キリストのご聖体の祝日、主イエス・キリストがその十字架の死と復活をもってわたしたちもたらしてくださった、神の子として生きる新たないのちにあずかるために、今もわたしたちの中に働く主の霊である聖霊が、教会の秘跡を通してわたしたち一人ひとりに分け与えてくださるこのいのちの恵みに大いなる感謝をもってあずからせていただきましょう。年間の最終主日である王であるキリストの主日までの、教会の暦の年間のこの季節は、わたしたちがそれぞれの人生を信仰者として生き抜き、最終的にイエスキリストのもとに集うその日までのわたしたちの信仰の旅を思わせます。暦に従って流れる時の流れの中を生きるわたしたちの信仰者として生きる日々が、その旅路を支えるいのちの糧として、今日もわたしたちに注ぎ込まれる愛のいのちそのものであるイエスのご聖体によって養われ、生かされる幸せを喜び合いたいと思います。

聖体を意味する教会のことばは幾通りかありますが、エウカリスチアという表現は、特に意味深いと思います。エウカリスチアということばは、最も普通には感謝を意味します。日本語のミサ式次第では、ことばの典礼に続く、主の晩餐を記念するミサの中心部分は感謝の典礼と訳されています。エウカリスチアということばはもともとギリシャ語から来たことばで、その中には、ギリシア語のカリス（恵み）ということばが含まれています。エウカリスチアはよき恵み、すばらしい恵みという意味にも取れます。聖体に凝縮されて示されている、イエス・キリストによってもたらされ、開かれた恵みの全てに感謝をささげて、わたしたちは聖体のうちに現存されるイエスとともに、父なる神に感謝の典礼であるミサをささげるのです。ミサにおいて捧げるエウカリスチア・感謝においてわたしたちは一つになって、エウカリスチアである主の一つのからだである聖体に養われて、神への感謝のうちに一つに結ばれるのです。この感謝を世の終わりまで、主が来られるその時まで、この世に向かって告げ知らせることこそ、聖体のうちに凝縮された、神のわたしたちへの愛の恵みによって救われ、生かされているわたしたちの使命なのです。聖体制定の晩餐のとき

の主のことばに続いて司祭は「信仰の神秘」と唱え、わたしたちは「主の死を思い、復活をたたえよう。主が来られまで」と唱えます。ラテン語のこの部分を直訳すると、「主よ、わたしたちはあなたの死を宣べ伝え、あなたの復活を宣言します。あなたが来られる時まで」となっています。エウカリスチアの祭儀にあずかり、感謝をささげることこそ、カトリックの信者としてのわたしたちの生きる拠りどころであり、そのことを世界に向かって宣言するわたしたちの使命なのです。今日、キリストの聖体の主日、特別な感謝の思いのうちわたしたちの信仰の神秘を祝って、このエウカリスチアのミサをともに捧げましょう。